

## ✦ 世界と捕鯨 ✦

日本と諸外国では大きく考え方が異なり、時には軋轢を生む“クジラと捕鯨”の問題は、遂に、2018年12月、日本はIWC（国際捕鯨委員会）からの脱退を表明した。元来、日本文化の中では、クジラはどのように捉えられて来たのか？

古くは、勇魚・魚王・神魚・大魚とも称され、魚類と見られていたが、初めてクジラが哺乳類と明らかにしたのは、1760年、自己の実見から得た材料に専門的な解説を加えて「鯨志」(図1)を著した江戸時代中期の本草学者(薬種商)、山瀬春政である。

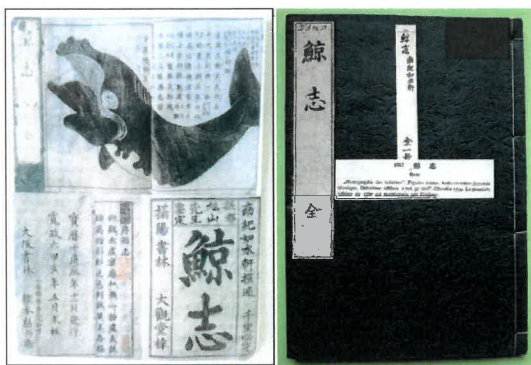


図1. 山瀬春政「鯨志」

その後、これを江戸時代の蘭方医であった岡研介がオランダ語に訳した「紀州産鯨」は、1800年代の“未知の国日本”を記したシーボルトによる著書「NIPPON」でも、クジラの知見に活用された(図2)。

近世、捕鯨地は別として、クジラに対する考え方は地域で異なっていた。クジラが諸魚を追って、沿岸にマグロ・カツオ・イワシなどの回遊魚を招く漁村では“クジラ一頭七浦潤う”という、1頭の捕鯨で7つの漁港に恩恵を与える守護神として崇拝されたが、加賀や北海道では、クジラのために魚が寄りつかず、“クジラ一頭七浦枯らす”沖の神として、怖れられていた漁村もあった。捕鯨地では仏教の普及もあって



図2. シーボルト「NIPPON」捕鯨図

クジラは神聖化され、鯨墓などによる供養や鯨神事も行われていた。

シャチなどに追われて死傷した沿岸浮遊の捕鯨もあるが、ホコ・モリによる捕鯨は1213年に紀伊で始まり、1606年、紀伊国で“突獲法”による突組が編成されると、その技術が伝わり、南房総・土佐・九州などで西海捕鯨を興隆させた。1675年、モリと網による“網格式捕鯨法”(図3)が考案されると捕鯨量も増え、和歌山藩の主導で1789年以降、合同捕鯨業が起立。1830年代には、三陸沖で銃殺捕鯨が試みられ、1868年には本格的な「近代銃殺捕鯨法」(図4)が導入されると、網格式捕鯨法は姿を消した。



図3. 「併用網格式捕鯨法」



図4. 「近代銃殺捕鯨法」

江戸幕府は1633年に始まった鎖国令によって、日本船の海外渡航を禁止、海外在住の日本人帰国を禁止、貿易地を制限、ポルトガル人の追放を命じ、長崎でオランダ船と中国船との貿易のみを行う体制を築いた(図5)。

この政策の主目的は、当時、全国に広がっていたキリスト教の禁止と宣教師の国内潜入防止にあり、1639年以降は九州を中心とする沿海防備体制が形成されたが、朝鮮とは対馬藩を介して国交を結んでおり、琉球も鹿児島藩の支配下にあったが、1853年、アメリカ使節ペリーが来航し、その開国要求に屈して鎖国は終わりを告げた。





図5. 鎖国時代の来航国

1760年～1830年代、機械の発明と応用を起点に大衆消費生産の機械制工場生産化が中軸となり、資本・賃労働関係が全経済の基軸となるに至り、イギリスで綿紡績業を中軸に“第1次産業革命”が発展し欧米諸国もこれに対抗して産業革命を推進させた。

日本では、幕藩体制下での小商品生産の一定の成熟、開港後の貿易に伴う商品経済の再編、政府による原始的蓄積政策の推進を前提に、1886年以降の企業勃興により開始された。輸入紡績機による大規模の綿紡績会社が続出し、輸入綿花を用いて低賃金の若年女子を昼夜2交替制でフル活動することで、手紡糸やインド綿糸を駆逐し、1897年には中国を中心とする綿糸輸出が輸入を上回った(図6)。

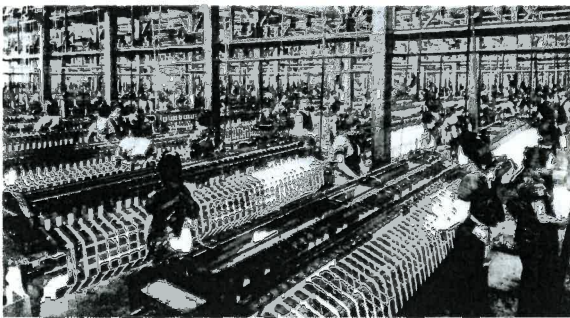


図6. 明治時代に始まった紡績の機械化

欧米諸国は、その頃、世界中の海で油を取るため大量に捕鯨していた。クジラの分厚い脂肪層を煮詰めて取った油は高品質で、ランプ用や食品原料など様々に使われていたが、なかでも精密機器の潤滑油の代用品が欠如していた。捕鯨の最盛期の1846年、イギリスなどの捕鯨船230隻が操業し、アメリカは736隻の捕鯨船を持ち、捕鯨産業には7万人もが従事していたため、世界では1000隻もの捕鯨船で世界の海から1年間にクジラは何万頭も乱獲され、クジラを絶滅に追い込んでいった(図7)。しかも欧米ではクジラを食すことはなく、単に燃料用油として“鯨油”が欲しかったため、海の哺乳類を殺傷して

いることを公言せず、“便利な魔法の油”とだけを表示していた。



図7. 欧米人によるクジラの乱獲

新興国アメリカが、ペリー提督を派遣して日本に対して砲艦外交を展開できたのは、クルミア戦争勃発で、欧州列強の関心が日本を含めた東アジア地域にまで及ばなかったことが理由の1つである。

1853年10月、ロシアが航海できる港を獲得するためにクリミアに接近したため、仏・独・英との戦争になっていた絶妙な時期に、アメリカは捕鯨船の寄港地として、さらに“清”を始めとしたアジアへの進出拠点とするため、日本に開国を迫ってきた。

米国海軍提督ペリーは、浦賀に来る前に小笠原に上陸し、米国による植民地化を図ったが、捕鯨船の水や食料や燃料の補給基地として、欧米列強諸国が争奪戦を繰り広げた場所であった(図8)。

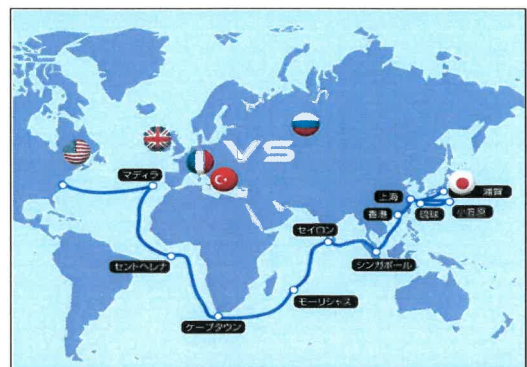


図8. クリミア戦争抗争図とペリーの航路

日本では、古くから捕獲されたクジラは鯨油のみならず、全てが有効活用されている(図9)。

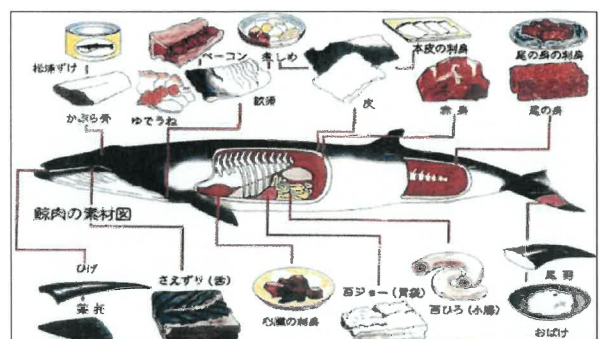


図9. 日本におけるクジラの資源活用